

事業の背景・目的

平成30年に中央アルプスで50年ぶりにライチョウのメス1羽が確認されたことを受け、環境省の「第二期ライチョウ保護増殖事業実施計画」で中央アルプスにおける個体群復活事業が開始された。域内保全と同時に、動物園からの野生復帰事業が重要な課題として定められ、那須どうぶつ王国はこれまで取り組んできた域外保全事業で得られた知見や技術を応用し、令和3年度に中央アルプスから野生個体を受け入れて飼育管理を行っている。これらの個体を元に、令和4年度以降は野生個体の飼育繁殖に取り組み、その雛鳥と母鳥の一部を野生復帰させることが目標である。



事業の内容

中央アルプスから動物園へ導入した野生ライチョウの飼育下繁殖に取り組み、生息地で生存し得る能力を身に付けるための前期野生順化を施したうえで野生復帰（放鳥）し、中央アルプスにおけるライチョウ個体群復活を目指す。

令和4～6年度

事業① 飼育下繁殖事業

- ・野生ライチョウの自然繁殖に取り組み、行動学的調査、生態学的調査を行い科学的知見の集積に努める。
- ・孵化後は前期野生順化を施し、一部を中央アルプスに放鳥することで中央アルプスにおける個体群復活に貢献する。



事業② 餌資源確保事業

- ・ライチョウ特有の腸内細菌叢を維持するために、主要な餌資源である高山植物を近隣山岳の那須岳で採取するほか、園内での栽培を試み、山岳からの採取のみに頼らず高山植物を供給できるよう努める。



令和5～6年度

事業③ 遺伝的多様性維持事業

- ・野生ライチョウの遺伝子を持つ個体と、保険個体群の個体を交換することで、中央アルプスおよび保険個体群の遺伝的多様性の維持に努める。

得られた成果

中央アルプスから導入した個体について、令和4年度に孵化した雛に生息地で生存し得る能力を獲得させるために、起伏に富みながらも安全面に配慮した放飼場を整備し、特有の腸内細菌叢を維持させるために高山植物を供給した。また、自然に近い巣を作って営巣状況のモニタリングを行なう状況を整備したり、高山植物を維持できるよう圃場整備を実施するなどした。これらを踏まえて自然繁殖に取り組んだ結果、4家族の形成に成功し、細菌検査などの事前チェックを行なった後令和4年8月にはそのうちの3家族（計19羽）を野生復帰に供した。野生復帰を行なう際には個体の移送に立ち会うと共に、中央アルプスで野生復帰させた個体の状況を確認した。環境省の報告では10月末時点で、当園から野生復帰させた個体のうち9羽の生存が確認され、中央アルプスにおける安定的な個体数の確保に貢献していると考えられる。

